

未来のために 学生のチカラで 今できることを



適度に汗をかき、ストレス発散にもなるという竹林整備。竹は処分するばかりでなく、食器などに有効活用することも。「伐採後のスペースを、周辺住民の方の交流広場に整備できたらと考えています」



正木 研史郎さん
ASUVID 京田辺 代表

兵庫県明石市出身、理工学部3年次生。東日本大震災を機にボランティアに関心をもち、ASUVID京田辺で2021年4月から代表。人前で話すことへの苦手意識は活動の中で克服。「目立つことって悪くないと思えるようになりました」

※学年は取材時の学年

地域に根差した活動をモットーとする「ASUVID京田辺」は、本学と同志社女子大の学生約200人が所属する、京田辺キャンパス最大のボランティアサークルだ。京田辺市内での子どもの学習支援や竹林整備、障害に関するワークショップ開催をはじめ、清掃活動や棚田での稲作支援に、京都府外へ赴くこともある。IVUSA(NPO法人国際ボランティア学生協会の支部としての活動もあり、姉妹サークル「ASUVID今出川」や他大学との交流も多い。代表を務める正木研史郎さんは「いろんなボランティアを体験できるのがうちの魅力。面白そう、何かやってみようと思える雰囲気があります」と話す。

大所帯だけに、グループ・班制度を作って

各リーダー格に取りまとめを任せ、SNSを活用して連絡を取り合う。常時5、6種類あるボランティア活動のリーダー格は固定しているものの、メンバーは所属する班にこだわらず、関心のある活動にいつでも参加できる。参加への強制はなく、年間通じて様々なイベントもあるアットホームなサークル。友達づくりのために入ってくる学生もウエルカムだ。一見ゆるい形態は、ボランティアに対するハードルを下げるためのだと正木さんは言う。

「例えば清掃活動に参加すれば、ただゴミを拾うだけでも『ゴミ多いな』『なんでこんなに多いんやろ』って見方や考え方を必ず持つと思うんです。『どうしたらゴミがなくなるんかな』と思うようになると、テレビの向こう側にあるように感じていたSDGsや社会問



アスビッド ASUVID京田辺

教育、環境保全、防災、地域振興など、手掛けるボランティア活動は多岐にわたる。毎年150～200人の学生が在籍し、様々な活動を通し、地域住民らと交流を深めている。



題が、自分に関係のある問題に変化していくと思うんです」

実践で「自分ごと」に

視野を広げられる思いを、正木さん自身は市内にある「こども食堂」の支援を通して味わった。「参加するまでは、賞味期限切れの近い食材を有効利用して、経済的に恵まれない子を支援するものだろうと思っていたんです。でも、実際にはいろんな子が来るし、フードバンクを通して新鮮な食材がたくさん寄せられている。運営されている団体はシルバード世代の方が中心で、その人たちの生きがいにもなっているようでした。貧困対策というより居場所支援。それも子どものためだけじゃないんだと目を開かされました」

夕食ができるまで、子どもたちの話し相手や遊び相手になるのがASUVIDの役割だ。「『またお兄ちゃん来た』と笑顔で子どもに言われると自分も幸せな気分になります。コロナ禍による中断を挟んで再開したときは、たとえ黙食でも、子どもたちはうれしそうでした。『子どもたちは、次も学生さんが来るものだと思って待っていてくれる。継続して参加せなあかんよ』。主催者に言われた言葉が胸に響き、先輩たちが始めた活動を、これからもつないでいかなければと強く思いました」と正木さんは話す。

定期活動に加え、祇園祭会場でのゴミ拾いなど単発の様々な活動に参加する中で、

問題意識を持つて取り組んでいる人の多さを知った。同時に、それでも支援の手は全然足りないということも。自分たちの活動のベースは、SDGsのゴールでいえば「11 住み続けられるまちづくりを」なのだろう。でも、続けていくことできつと、他のゴールともつながっていく。そう思えるようになったのは、行動したから。だからやっぱり、「参加しないと始まらない」。

「ここでボランティアに触れることで、卒業後も『人助けになることをしてみよう』って思える人を輩出できれば」と正木さん。一つ一つは小さな点でも、数を増やし、継続することが、持続可能な社会を実現すると信じている。

参加して初めて、
気づけることが
きつとある



をSDGsで橋渡し

SDGs
を考える。

特集
Special Feature

現地の人の声で
やりがいを実感

取締役副社長
樋口 麻美さん

幼少期はアメリカ、南アフリカ、オーストラリアで育ち、途上国各国でインターンシップを経験。同志社大学グローバル地域文化学部アジア・太平洋コースに入学、2018年卒。在学中にカンボジアで教育支援NGOを設立したカンボジア人の友人に共鳴し、日本支部を立ち上げ資金調達に努めた。卒業後、IT人材ベンチャーONE CAREERに入社。その後、ソーシャルマッチ株式会社の立ち上げに参画。



東南アジア企業とのマッチングを通じて、日本企業のSDGsへの取り組みと海外展開を支援するサービスを提供している「ソーシャルマッチ」(代表取締役・原畑実央、東京都墨田区)で現在、取締役副社長を務める樋口麻美さんと、教育事業「ソーシャルスタディ」担当の金愛月(きん・えうおる)さんは、ともに同志社大学の出身で、途上国支援に取り組む公認サークル「国際居住研究会」で知り合ったという。2人にソーシャルマッチのビジネスについて語ってもらった。

——ソーシャルマッチで、それぞれ担当している仕事の内容について、教えてください。

樋口 現在、東南アジアの6か国で、107の企業、NGOと提携し、途上国での社会問題解決に貢献したいけれど、提携先や仕

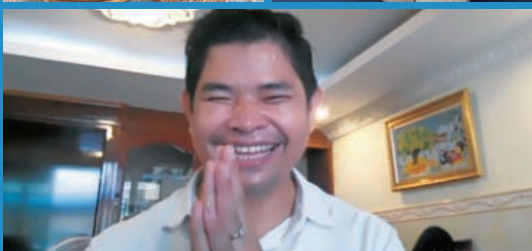
方がわからないで困っている日本企業とのマッチングや企画の提案、プロジェクト進行のサポート事業などを展開しています。元々この事業は、現代代表取締役の原畑がカンボジアを拠点に行っていたもので、2019年12月に2人で法人化しました。SDGsという言葉は、最初は全然意識していなくて、周りの方から指摘されて初めて、SDGsと親和性の高い活動をしていることに気がつきました。

上でその解決策について現地学生とともに考え、実践する学生向けのSDGsインターンシップを主に提供しています。

——仕事を通じて、どのような時に、やりがいを感じますか？ 普段、心がけていることは何でしょうか？

樋口 創業以来、2年余りの間に、フェアトレードを希望する起業家の方とカンボジアの特産品である竹細工の製造業者とのマッチングや、障がい者施設で作っているドライマングローの日系お土産店での販売の仲介など、70以上の案件で実績を残しています。私たちの力添えによって、『おかげで業務を継続することができた』や『雇用を増やすことができた』と言ってもらえることがあります。社会問題の解決への貢献を実感することができ、とても

[マッチング事業]



フェアトレードを希望する起業家とカンボジアの地方で若者の職業支援を行い、竹製品を製造するNGOとのマッチングに成功。カンボジアでハンドメイドされた竹製インテリア商品を販売するフェアトレードブランドの設立を支援した。販売利益の一部はNGOに寄付され、若者への職業訓練支援や雇用創出活動に活かされる。

海外と日本の企業

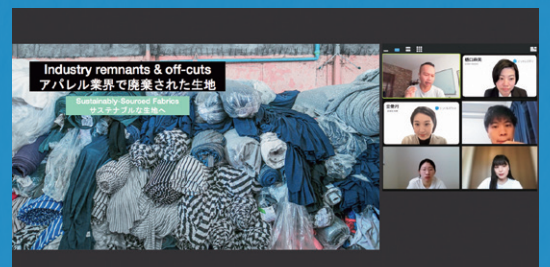


いまやりたいことが
将来の軸になる

ソーシャルマッチ株式会社

「世界にある社会問題をマッチングにより解決する」という理念のもと、社会問題解決に取り組む東南アジア6か国107社の現地企業やNGOと提携し、ビジネスマッチング事業、教育事業、調査事業の三つを展開する。業務提携や輸出輸入取引、共同製品開発などこれまでに71件のマッチングを支援し、教育事業ではこれまで約300人以上の日本人と現地国籍の学生が参加している。

〔教育事業〕



学生向けのSDGsインターンシップを提供。SDGsの基礎講座や東南アジアの社会起業家とのディスカッションで課題解決に取り組むプログラムを実施している（写真はカンボジアのアパレル問題に取り組む社会起業家とのミーティング）。

やりがいを感じています。

金 私自身、学生時代、問題解決に取り組みたくても、方法やスキルの身につけ方がわからず、足踏みすることがありました。学生時代に立ち返って、学生の皆さんが望んでいるプログラムを提供できるよう心掛けています。

—— 途上国の課題解決に関心を抱くようになったきっかけは何ですか？

樋口 三つ年上で同じサークルに所属していた姉から、その活動内容を聞いたのがきっかけです。学生時代は、周りから「いつもカンボジアにいるね」と言われるぐらい、現地でのボランティア活動に取り組みました。

金 高校時代に途上国でのボランティア活動を話してくれた先生から影響を受け、いまの仕事に導かれました。新卒で海外勤務の

仕事に就いたのですが、樋口さんの誘いを受け、2020年11月にソーシャルマッチに加わりました。

—— 今後、ソーシャルマッチで実現していきたい目標を教えてください。

樋口 ソーシャルマッチを資金や技術、人材といった社会問題の解決に必要なリソースを提供できるプラットフォームにしていきたいと思っています。同時に、アフリカや中東など問題解決の緊急性の高い地区にも事業を広げたいですね。

金 インターンシップの先の目標として、SDGsの17番目の目標にあるように、大学生と社会・企業がパートナーシップを組んで持続可能なビジネスを構築できるような仕組みを作りたいです。

—— 後輩の皆さんへのメッセージをお願いします。

樋口 同志社大学には、自分がチャレンジしたいと思ったことを可能にしてくれる場がたくさんありました。大学に進学して世界と選択肢の幅が広がるものの、二歩を踏み出せない人もいます。ぜひ、勇気をもって、自分の興味のあることに踏み出してほしいですね。

金 いまやりたいと思うことが、将来の仕事になるわけではないかもしれませんが、自分がやりたいことに取り組むことで人生の軸になり、自身の価値観が形成されると思います。ぜひ、いまやりたいことに取り組んでほしいです。

「ソーシャルスタディ」担当

金 愛月さん

同志社大学経済学部に入學し、2019年卒。在学中にフィリピンで若者の貧困支援を行い、英語教師を育成する語学学校で新規事業立ち上げを担い、韓国マーケットの開拓を手掛けた。卒業後、人材紹介会社REERACOENのタイ支社で勤務。その後、ソーシャルマッチ株式会社に参画。

